

はじめに

まず、本書を手にとっていただきありがとうございます。

この本は、

施設に入る前の五、六才から中学卒業するまでの十五才を執筆しました。
途中、センチティブな内容も含まれますがすべてノンフィクションです。

もし、気分がすぐれなくなったら、容赦なく本書をとじてください。

施設にいる君へ

やあ、僕の本を開いてくれてありがとう

今から君の話を少しだけさせてほしい

信用がない僕が話すのはちょっと嫌かな
これはどうだろう？

保母さんに内緒にしてねと約束したのに、全員が把握している
スリッパの音でだれが来たかわかる
家なのに学校のチャイムが鳴る

少しは仲間として認めてもらえたかな
あんなに嫌だったことも、君と話すと楽しくなる

僕も君と同じ、名もなき戦士だったんだ

誰も知らないんだ

君が平気なフリをしているの

壊れてしまいそうなのに

本当は息がつまるくらいツライのに

君はまた強がっちゃう

だから

僕が話をするね

施設に入るまで

僕の記憶が始まるのは保育園の記憶からです

送り迎えは母がしてくれました

家はその時代珍しく共働きでした

なので基本、運動会やおゆうぎ会などの行事には出席できなかったみたいです

大人になってから聞いたのですが、どうやら駆け落ちして結婚したそうです

母は僕を産んだ時十八才でした

運動会で先生と誰もいない教室で食事するのが嫌でしかたありませんでした

一番覚えてるのは

父の日にお父さんの顔を作ったクッキーを焼こうという保育園の企画で、一生懸命作りま
した

あの時ほど父の顔を思い浮かべたのは、これが最後でした

家に帰って父に渡した記憶はあるのですが、何て言われたかは覚えてません

何日かたったある日、カビだらけのクッキーを見つけました

僕は母が大好きだったので料理を作る母の側をよくうろろしてた

フレンチトースト

目玉焼きがのった焼きそば

フライパンいっぱいホットケーキ

とき卵入りのチャルメラ

今でもこの四つを作るときは、母と同じ作り方をする

弟が生まれた

母と父はよくケンカをするようになりました

そのうち父は帰って来なくなりました

僕は小学生になって「鍵っ子」になった
首から家の鍵をぶら下げてるあれだ

家族で食事することは無くなってしまい

母は僕らが寝ている間に出かけて
寝てる間に帰って来る生活になっていった

僕は母に学校での出来事を話したくて

弟を寝かしつけて母が帰ってくる夜中まで起きてた

ガチャンという玄関の音が鳴ると胸が弾んだ

母が帰ってくると瞬く間に玄関に行って

元氣よく「おかえりなさい！」と言うのが
いい子にしてたよ！いっぱい誉めて！という合図だった

まだ起きてる僕をみて母は怒鳴りました

母も疲れてたと思います

友達と遊んでる時、夕方に帰る友達の背中を見送るのが辛くて

見送ったあと僕は嘘つきました

母が作りおきしてくれた小ぶりの冷たいおにぎりを、洗濯物の下に隠して
友達のお母さんに電話をしました

「お母さんがご飯作るの忘れちゃったみたいで・・・」

友達のお母さんは、食事を持って来て僕の家と一緒に夕飯を食べてくれました
たくさん話を聞いてくれました

あったかいご飯がおいしいという事を

この時はじめて知ったのかもしれませんが

ある日家に帰って、冷凍庫で牛乳を凍らせるのがマイブームだった僕は

朝入れた牛乳を取り出しました

牛乳がぬるかったんです

その時は何がおこってるのかわからなかったんですが

いつもと何か違う気がしました

電気が止まってしまい

母も帰って来なくなりました

僕は母に何かあったと思い

僕が大人にならずにちゃと思った

弟を保育園に連れて行った

何を言われたかは覚えてないが帰されたのを覚えている

オムツを変えた

当時はテープでとめるタイプだった

お風呂にいった

手を滑らせてしまい

湯船に落として必死で引き上げた弟は泣かなかった

ミルクを飲ませたあと

ゲップがうまく出させてあげられなくて

よく吐かせてしまった

眠るとき

弟はお腹をトントンしないと眠れなかった

抱き方が悪く

大人になった今でも弟の頭の形は

普通よりちょっと縦長になってしまった

僕は残されたわずかなチャルメラを

母と同じように作って食べてた

同じように作ることで

母が作ってくれたチャルメラを食べているんだと思ったんだ

生まれてこなければよかった

そう思ったことは何度もあった

実際に母にもその言葉をぶつけたことがあった

母は僕を突き飛ばし

何度もお尻を叩いた

やめたと何度も泣き叫んだ

横目に見えた母の顔は

僕のお尻と同じくらい赤く

泣いていた

マンションの四階に住んでいた僕は
一度ベランダから飛び降りようとしたことがある

小学生で自殺のやり方を知っているのはおかしいと
言われると思うが
当時、テレビドラマなど見ていれば

「死にかた」なんてものはいくらでも知っていた

イスを使い

手すりに乗った

金属の冷たさと風の音がやけにうるさい

少し怖いけど

僕が死ねば

お母さんは帰って来ないといけなくなる

ケガでもいい

大人が騒ぐようなことをしなくちゃ

そうすれば

お母さんが帰ってくるんだ

ひざを曲げて、手すりを掴む

こわい

死にたくない

でもやめたらお母さんは帰ってこない

だれか

たすけて

弟が泣いていた

しばらく泣いていたのか

せきこんでた

僕は飛ばなかった

オムツを変えるのを言い訳にして

僕は飛ばなかった

手すりを握っていたからか

オムツを変えるとき

自分の手のひらが黄色くなっているのを見て

ついさっきまでの出来事が、現実になってくる

こわかったんだ

僕はそこから児童相談所に送られるまで
記憶が無くなっている

ここからは父から聞いた話で進めていく

母から「家を出ます。子供は置いてきた」と連絡があったらしい

あわてて帰ってきた父はその時の事をこういつていた

「もう家ん中荒れ果てちゃってて、お前たちもガリガリなっちゃってて、何が起きてるのかさっぱりわからなかった」

父は僕たちを車に乗せて母の実家に向かったらしい

母の家族と話し合いがあり

僕たちは「責任を持って母の実家で引き取る」ということになった
その代わり

父には

「今後一切近寄らないでくれ」と約束をしたらしい

父は子供達がそれで良ければといい

僕たちにどっちと暮らしたいかを聞いた

答えは言うまでもなく母だった

それが父との最後の別れだった

その後、母は社会復帰するために学校へ（母は僕のせいで中退していた）

母の姉が施設への手続きを済ませたらしい

母と一緒に暮らしたいと言って数日後に
新しい保育園だと紹介されたのが

児童相談所だった

児童相談所では、あらゆる事を調べる

好き嫌い

運動能力

病気やアレルギー

心理テスト

IQなど

ありとあらゆるテストをして
施設の行き先が決められる

喘息（ぜんそく）持ちなら空気がきれいな田舎の施設へという感じだ
僕が覚えているのは二つだけだった

先に児童相談所にいた高校生の二人組からいじめられたこと

ドラゴンボールが全巻あったこと

そしてある日母が訪ねて来た

迎えに来たといい
有頂天に登った僕と弟はニコニコしながら
車に滑り込んだ

久しぶりのマクドナルド
少し髪が伸びた母の横顔
弟と助手席を交換で座った事

今でも覚えている

これからずっとお母さんといれるんだと信じてた

児童養護施設に着くまでは

児童養護施設

施設に着いた僕は園内を案内された

自分たちと同じくらいの年の子がたくさんいた

一階が

遊戯室（体育館）

保育室

学習室

食堂

お風呂

事務所

ボイラー室と洗濯室

二階には子供達の部屋がズラリと並び

保育室が一つあった

スリッパの音で気づいた子供達はたちまち覗きに顔を出していた

僕も暮らしてわかるようになったが

スリッパの音である人だとピンポイントでわかるようになる

この日僕らのスリッパは来客用のスリッパなので

新しい人か、卒園生

このどちらかになる

学校みたいだとわくわくする気持ちもあったが
弟の顔は次第に雲っていった

僕はなんとなく母の顔を盗み見て気づいた

僕達はここで暮らすんだと

一通り見終えて職員玄関へ戻ってきた

母だけ帰り支度をしていたことに

弟は気づいてしまった

弟は玄関に駆け出し両手を広げて

母にそっくりなその瞳は

今にも涙がこぼれそうだ

涙をこぼすと母が行ってしまう気がして

我慢してるのがわかる

母が「必ず迎えにくるから」と弟をなだめる

僕はその瞬間、母への愛がどんどん憎しみに変わっていくのを感じていた

弟をこれ以上泣かせるな

もう充分弟は我慢してきた

これ以上何を背負わせるつもりだ

大人達の表情からもわかる

ここは僕がなだめるのがベストだ

僕がなだめた方が美しい

大人ってそういうのに弱いでしょ？

だから僕は演じた

辛い表情を作り

拳を震わせ

弟を引き離す

僕の辛そうな表情をしっかりと母に見せつけ

一生忘れられないような後悔を植え付けてやろうと思った

大好きだった母よりも

弟の方が大事になっていた

弟がいなければ僕はとくに生きることを諦めていた

こいつだけは渡さない

傷つけるだけの

あんたになんか絶対に渡さない

そう誓いながら施設を後にする母をにらみつけていた

夕飯の時

僕と弟は紹介された

施設は二才〜高校生三年生までいて

全員で三十名弱

多いときで五十名近くいるときもあった

食事するテーブルは小中高と別れていたの

弟とは違うテーブルになってしまった

施設がキリスト教だったので

食事をする前にお祈りをするのが決まりだった

今でもこのお祈りの言葉は覚えている

決まりを教えられながら食事をするのは
なかなか大変だった

これからここで暮らさなきゃいけないんだ

僕はこの日からご飯粒を残さずに食べるようになった

気に入られるために

入ったばかりの弟は四六時中僕にくつついてた

僕の小さな人指し指に

もっと小さな手がぎゅっと握りしめてくる

寝るときも僕はお腹をトントンしてた

「兄ちゃん」というあの心細い声を聞くたびに
胸がぎゅうっとしめつけられた

学校生活はというと

弟はまだ保育園児だったので

僕一人で転校生をやらなければいけなかった

後ろ楯がないのがこんなにも心細いものかと思った

その学校では度胸試しとして

階段の何段上から飛び降りられるかを競うのが流行っていた

僕は一番上から飛んだ

みんなすごいと言ってくれて

なんとかクラスに馴染んだ

べランダに比べれば何も思わなかった

勉強もがんばった

弟が小学生になったときに

自慢できるような兄になりたかったからだ

居場所を作ってあげるんだ

小学三年生まで百点以外取ったことがなかった
順調だった

ある日のテストで九十二点をとった時に

僕のプライドは跡形もなく粉々になった

もうダメだ

僕は不良品になってしまった

今では笑い話にできるが

この時はそれがすべてだった

父親の変わりをしないといけないという

気負いが小学低学年の僕には背負いきれなかった

そこから僕は

高校生の不良グループとつるむようになった

そこからが地獄の始まりだった

施設で学校に行かない人たちが何人かいた

当時不良に憧れていた僕はサボるとというのがカッコいいと思っていた

学校をサボればおのずと中高生グループと遊ぶようになる

最初に覚えた悪いことはタバコだった

マルボロを吸っていた高校生がやけにかっこよく見えて

僕もシケモク（消した後のタバコ）をもらって

真似して吸っていた

その高校生は万引きの常習犯だった

僕は見張り役で先輩が盗むという感じだ

二人共ゲーム好きなことがあり

盗む物もゲームだった

大型デパートのゲームコーナーに行き

僕は見張りとして店員を足止めする

当時はレジのすぐ後ろに商品があったので

先輩はレジを乗り越え

品選をせずガサツと一掴みでカバンに入れる

スピードが大事だった

人目のつかない所で品定めをする

欲しい物は当たり

いらぬものはハズレ

小学生だった僕にはとても刺激的で魅力的だった

同級生が机に向かっている時に

みんなには絶対に経験できないことを一足も二足も先に経験している
先に大人になったとさえ思っていた

ゲームだけでは飽きたらず

お金にまで手を広げていた

賽銭泥棒でいかに大きな金額を盗んだか

それがステータスになる世界

その多すぎる百円玉や十円玉を

パシリだった僕がコンビニで消費する

僕が高学年になったときに

先輩は駄菓子屋のレジのお金を盗んで捕まった

夜尿症（やにょうしょう）

という言葉聞いたことがあるだろうか

いわゆるオネシヨだ

環境の変化やストレスによって、引き起こされる病気だ

僕は施設に来てオネシヨをしだすようになった

オネシヨが原因でいじめられることもあった

夜尿症という言葉がまだ浸透していなかったし

僕もオネシヨをするたびに自分を呪った

「高学年になったら迎えに来るね」

施設の保母さんから伝言を聞いた

その言葉を支えに施設の生活をなんとか乗りきっていた
施設で高学年は四年生からだ

迎えには来なかった

信じた自分がバカだった

僕は知らない子なんだ

一番納得できる答えがそれだった

僕の担当の保母さんに自分の母は嘘つきだと罵った

保母さんに罵った所で何も変わらないのはわかっていたが

そうせずにはいられなかった

そうしないと頭がおかしくなるんじゃないかと

吐き出すように泣いた

担当の保母さんは老人ホームから移動してきたばかりで
いきなり僕みたいな子の担当で困っていたと思う

暴れる僕を必死に抱きしめる

知らない人に触られるのがいやでもっと暴れた

保母さんは一度も腕を緩めず
一緒に泣いてくれた

落ち着いた頃

保母さんはポツリと言った

「お母さんに手紙書こう」

僕はコクリと頷いた

この年からオネシヨをしなくなった

今現在でもこの保母さんとは連絡を取り合っている
定年退職を迎えた年にお祝いをかねて食事に行った
その時に手紙の話をしてくれた

「私は施設に来て初めての担当があなただった

右も左もわからなくてあなたと一緒に泣くことしかできなかった

手紙を書こうと言ったけど

返事が来なかったら私が書くしかない！と思ってた」

僕らは声をあげて笑った

この人は僕が卒園するまでずっと担当だった

なにもかも知っている

僕が大人になってゆく過程をずっと見てきてくれた

あなたがいなかったら、俺は人の道を外れてたよ

あなたが教えてくれた数々の言葉や行動は

今の時代でもまちがってないよ

ありがとう美恵子さん

実名だけど悪い話じゃないし

いいよね？

夜中に一つの部屋に集まってUNO（ウノ）をするのが流行っていた

わからない人のために説明すると
トランプみたいなカードゲームだ

このゲームの敗者には罰ゲームがもうけられていた

最初はしつぺや一人で道路の真ん中で踊る
遊戯室のピアノを引いてくるなど肝試的な物もあったが
エスカレートしていくのは当然だった
指導員の車の上で小便をする
女子トイレに三十分いる

この年の施設は荒れていた
財布が無くなる

自分の買ったゲームが先輩に売られる
女子の下着がなくなったり

風呂の覗き

実習生がトイレを覗かれたりなんかも日常茶飯事だった
しかも覗かれた張本人に

「お前ケツ穴きたねえな」と平気で言う

大人は全て見てみぬふりだ
世の中じゃ犯罪だ

そんな連中の罰ゲームだ

もつとエスカレートするに決まっていた

当たり前だが先輩に勝ったりなどしたら袋叩きだ
僕も一度経験したが

布団を被せられて数人で殴られる

布団だったら痛くないんじゃないかと思ってる人に
なぜ布団を被せるか説明すると

高校生が小学生に思いつき殴るとしたら
布団を被せないと死ぬからだ

最初に苦痛を感じた罰ゲームはディープキスだ
もちろん男同士だ

僕のファーストキスは中学生の男とディープキスだった

次にキツかったのが小便を飲む

本当は便器の水だったが

悪のりした先輩達が小便を入れた

便器の水だったら慣れてるしと安心した僕を見て

おもしろくなかったらしい

口に含んだ時あからさまにしょっぱかったので

これは便器の水じゃないと叫んだが

彼らは便器の水だと言い張った

ルール違反として袋叩きだった

ピークの時の罰ゲームはフェラチオだった

僕は何人ものソレをシャブリ尽くした

一度弟もJZOに参加させられそうになって僕は必死で止めた

「なら弟の前でしゃぶれ」

僕は弟の見てる前でしゃぶった

涙は見せなかった

弟の前で泣かないと決めていた

僕は人生を諦めた

こんな汚れてしまった僕を誰が必要とするだろう

恋愛も結婚も自分の家族を持つことも

きつと無理だ

こんな僕に

誰がキスをしてくれるだろうか

小学四年生で

僕はすべての感情をオフにし

ロボットになった

転校が決まった

部落（ぶらく）が変わりもっと近い小学校へ通学することになった

施設の小学生は全員転校する事になった

もともと学校へ行ってなかった僕はどっちでもよかった

施設にいるのも嫌で

学校に行くようになった僕は

いつものようにグランドの端っかで隠れるように寝てた

人が溢れて来た

休み時間になったのかと顔をあげると

女の子が座っていた

同じクラスの子だ

小柄で顎のラインに切り揃えられた髪に

ほったがいつも赤いのがトレードマークだった

「教室来ないの？」と彼女は聞いてきた

行かないと伝え

僕はまた寝そべった

どうせ先生に言われて来たに決まっていた

何を話したのかは覚えてない

ただ、花の名前をした彼女は次の休み時間も隣にいた

転校先の学校は

すぐ裏が海の学校だった

正直この頃の記憶はほぼ無い

基本僕は保健室にいた

いつもの変わらない毎日を、ロボットのよう消化していた

保健室にはもう一人いた

同じ施設の同級生だ

彼は銃が大好きでよく教えてくれた

ルパン三世が使ってる銃はワルサーP38

シティーハンターの冴羽 獠はコルトパイソン

楽しそうに話す彼はとても輝いていた

その輝きが

何も感じなくなった僕の心はチクリと傷んだ

荒れていた先輩達は卒園し

僕たちは中学生になった

僕の中学は、四中学が合併（がつぺい）した中学だった

小学生までは一クラスしか無かったクラスが

中学では六組まであったのに驚いた

それぞれみんな

自分の小学校以外の人と会うのは初めてだった

先輩もこの中学にいるので

僕ら施設組は、あいさつまわりに忙しくしていた

保健室で一緒だった銃好きの同級生は

身体障害者のクラスにいた

本当に驚いた

施設に入ったときから一緒だったのに

この時まで僕は知らなかった

後から聞いたのだが

僕もこちらの教室に入れた方がいいんじゃないかと

議論があったらしい

結果一年間の様子見て
僕は一年三組になった

中学生活も数日が過ぎ
放課後部活の体験入学で賑わう人並みをかきわけて
下駄箱から自分の靴に履き替えてた時だ

ドンツと背中になにかがぶつかり、びっくりして振り向くと
女の子に抱き締められていた

「久しぶり」

花の名をしたあの子だった
髪はすっかり長くなり
なるほど女の子が女性になるってこういう事なんだと思った

急な展開に
賑わってたまわりも静まりかえってしまった

バツが悪くなった僕は
久しぶり、じゃあなと冷たくあしらってしまった
僕の悪いクセだ

彼女は一瞬泣きそうな顔になり
またねとどこかへ行ってしまった

それ以来

彼女と話すことはなかった

今思えば
あんな人前で抱きつくのは
すごく勇気があることだ
もしかしたら

彼女の渾身のメッセージだったのかもしれない

あのさびしそうな顔を

今でも時々思い出す

先輩達が卒園すれば
施設を牛耳る先輩も変わった

この時の先輩の直属のパシリが僕だった

先輩は「ゲームが好きだった
しかし腕前はあまりよくなかった

ゲームで全滅するとよくリモコンで頭を叩かれた

応援が足りない
そう怒られるのだ

もう意味がわからなかった
次負けたらお前千円な
先輩が負けるたびに

僕の借金は膨らんでった
必死に応援してた
そこっ！もっちゃつと！今ッス！

今この文章を書いても笑えてくる
最終的に僕の借金は五十万近くになっていた

この借金を返すために
○○のお金を盗んでこいとか

雪がふぶいている日にコンビニへ行って来いなど
精神的に追いこむ人だった

風呂上がりにコンビニへ行って勉強になったことが二つあった

一つは髪が凍る事
襟足がチクチクするなと思ったら
髪が凍っていた

二つ目はシャンプーの匂いで

施設のどこから抜け出したのかバレること

このシャンプーの匂いをかぎつけたのが

前回にも登場した美恵子さんだけだった

借金返済のためにいろんな事をした

タバコがなくなったから違う先輩のベッドからパクって来いと

言われた時は生きた心地がしなかった

その先輩はバリバリの武道派だ

もちろんバレてボコボコにされた

盗ろうとしたのは僕だからだ

このままじゃダメだ

学校サボって四六時中一緒にいるからダメなんだ

施設にいる時間をへらさないと身が持たない

施設の外に友達を作ろうと思ったのは

この頃からだ

なぜ仲良くなったのか覚えてないが

僕は寺の坊主のせがれと仲良くなっていた

彼とはよくバカをやって遊んだ

彼のまわりの同級生もいいやつばかりだった

夜中に彼らの母校の小学校に忍び込んだり

プールに全裸で飛び込んだり

初めて同級生と「遊ぶ」ということを経験した

楽しかった

友達がいるってこんなにも楽しいんだなと思った

先輩の暴力はエスカレートしていった

リモコンから鉄アレイになり
鉄アレイから将棋版になった

将棋版は折り畳み式ではなく
しっかりした土台のやつだ

人間には「慣れ」があるのか
リモコンで叩かれても何も感じなくなった
この頃の僕の頭はジャガイモみたいにいびつだった

その代わり同級生とケンカになっても
倒れる事はなかった
鉄アレイより強いパンチなんて聞いたことがない

ある日先輩が
プレステ2を一万で売ってくれるやつを探してこいと言ってきた

言われた通り探して見つけた
ちょっと仲がいい同級生だ

彼からプレステ2を受け取り先輩に渡した
もちろん一万円は払った

先輩はこの日優しかった
カップラーメンの汁を飲んでいigoと渡してくれた

翌日
友達の家から帰って来ると
先輩にいきなり殴られた

話を聞くと
同級生が泣きながら親と一緒にプレステ2を返して欲しいと来たそうだと
慌てた先輩は僕のベッドに証拠を投げこみ
隠れたそうだと

一万円借金な

その翌日

僕は友達を初めて殴った

友達を殴ったことが学校で問題になった

彼は僕が怒っていると思い

担任の先生にくっついていた

先生の前では何もできないと、思っていたのかわからないが

僕は先生の目の前で殴った

自分は絶対に間違っていないと思った

こいつは嘘をついた

現に一万円はもらっていないと言い張った

コソコソ呼び出して殴るなんておかしい

なんでこっちがコソコソしなくちゃいけないんだ

絶対的な正義が僕にはあった

確かに暴力はいけませんが我慢できなかった

しかし学校はそうじゃない

ロクに学校に來ない人間と

毎日真面目に授業を受けている人間

学校の判断基準は「態度だ」

僕はこの日

厄介者になった

寺の息子と仲がよかった僕は

彼の担任に言われたことがある

「あいつには将来がある。もう学校には來ないでくれ」

元々学校は施設の保母さんに無理やり連れて来られていたの
で別によかったのだが

施設にいれば学校に行けと言われていた

学校に行けばやる気ないなら帰れと言われる

この矛盾がストレスだった

先生から直接来るなど言われた

この理由であり学校に行けと言われてなくなったが
僕の担当の保母さんの美恵子さんはちがった

「あれだけ大人の言う事なんか聞かないって言ってたのに、今回は言うこと聞くんだね。ダ
ッセーなあ」

カチンと来た

凶星だった

確かに大人の言う事を聞いていた
しかも一番嫌いな教師の言う事を

今思うと、してやられたと思うが

当時は気づかなかった

僕は翌日から

先生達への嫌がらせのつもりで
まんまと学校へ行った

久しぶりに学校に行くと、みんなにひどいと言われた
なんの事かわからずにいると

同じ施設の同級生が、目に青アザを作っていた

僕が殴ったらしい

思わず舌打ちがもれた

事実は先輩が殴ったのだが
罪を僕に擦り付けたらしい

青アザを作った彼を責めなかった

先輩の命令は絶対だ

僕も自分が殴ったと言い張った

寺の息子はその嘘に気づいていた
どうして黙っているのかも知っていたので
彼も黙っててくれた

その後も寺の息子は僕とつるんでた

一緒にいるところを見つかると
彼の担任は

「やる気ないなら帰れ！寺の息子は受験を控えてるんだ！」

寺の息子は気にすんなと言ってくれたが
僕は距離を取った

僕の進路は就職だった

中学二年から学校に行かないかわりに
地元の大工さんの手伝いをしていた
もちろん無償で

大工さんは給料を払うと言ってくれたのだが
施設がいらないといったのだ

僕は三日で辞めた

施設の人は

「だらしない！」

「そんなんじゃ社会に出れると思うの？やってけないよ！」

「甘え過ぎなんだよ」

「高校行った方がいいんじゃない？」

こう言われた

大半の人がこれに同意すると思うが
ちよつと考えてみてほしい

給料の出ない仕事をしますか？

生活するために仕事をするのに

その仕事で生活ができるお金をもらえないのであれば
「辞める」んじゃないかと

施設にいれば生活には困らないでしょと言われそうだが
対価の無い物に時間をさくのは無駄だと思つてた

僕は大工さんになりたい訳じゃない
お金を稼いで自立をしたいだけだ

何度説明しても施設の人にはわかってもらえなかった

中卒したい理由が実はもうひとつあった

役者になりたかった

ゲームの主人公になりたいと小さな頃から思っていたが

当時のドラマは主役の生い立ちが施設育ちの設定が多かった

人にやさしく

香取慎吾さんが施設育ちだった

エンジン

木村拓哉さんが施設育ちだった

施設が題材のドラマはなぜか児童養護施設でも大人気だった

自分達が主役になれる

人によっては結婚するまで

自分が施設で育ったことを言えない人もいた

中でも木村拓哉さんがセリフで

「俺施設育ちッスよ」とさらっと言っただけでシーン
最高にかっこよかった

あのセリフをリアルに言える

本当に僕らの憧れだった

施設育ちは恥ずかしくない

香取慎吾さんの施設を紹介するシーンで

「俺の実家！」というシーンもかっこよかった

堂々と自分の家だと言えるのがこんなにもカッコいいんだなと痛感した

役者になりたい

それにはまず施設を出なければ

同級生が学校へ行く中

僕はハローワークへ足に向けていた

中学三年生になって就職先がどんどん絞られてきた

どの年も不況だが

この年も不況だった

畳屋

うなぎ屋

タイル工（建築）

今思うと畳屋なんかシブイんじゃないかと思うのだが

ニツカポツカにちよつと懂れがあつた僕は
タイル工に決まっていた

施設の進めでうなぎ屋の面接に一度行つたが
坊主にしなければならなく
僕はそれを嫌がつた

東京に行くのに坊主なんてダサすぎると
変なプライドがあつた

タイル工は電話面接で決まつた

就職が決まっているのに
施設は学校に行けと言つた

もうすぐ学生も終わるしと
見納めの様な感覚で学校に行つた

学校の授業は受験の話や高校の説明ばかりだつた
机に向かつてみんなと高校の説明を聞いていると
自分だけ取り残された様な気分になる
この年の中卒者は僕を含めて二人だつた
もう一人は同じ施設の同級生だつた

学校は就職の説明なんてしなかつた
やっぱりもう学校行く意味なんてないな

役者というやりたい事が決まっていた僕には
学校という物が自分に必要じゃなかつたと
確信に変わった

施設の先輩のバシリはまだ続いていたが当たり前のようにこなしていた
卒業式の練習が頻繁に行われているなか

僕は施設のグラウンドを拡張していた

何年もほうっていたグラウンドは

半分以上竹やぶになっていた

体力作りのために強いられた課題は

あまりにも過酷で逃げ出しそうになる

もちろんこれも無償だ

草のにおいと土のにおいが入り混じったあのにおいは
今でも時折嗅ぐ事がある

一人が好きだった

誰の言うことも聞くことなく

好きなことを考えられる

ある日実習生も僕の手伝いをする事になった

僕は一人の時間を奪われたような気がして

無愛想に接した

その後

この実習生と卒園しても連絡を取り合うとは

思ってもいなかった

卒業式の日

僕は学校に行かなかった

先輩からの用事があったからだ

みんなに会いたいなと思っていたけど

僕が行ったところで

みんなはなんとも思わないだろうとも思っていた

先輩の買い物しながら

僕は少しだけ泣いた

戻ると施設には担任の先生がいた

中三で初めて担任になったこの先生は
今までで、一番施設に足を運んでくれた先生だ

僕はこの先生は嫌いじゃなかった（実はちょっと美人だった）

先生は自分の話をしてくれる人だった

バツイチ子持ちな事

実は先生ではなく記者になりたかった事

記者になりたくて覚えた英語のおかげで
英語の顧問になった事

僕の話聞き出す先生はいくらもいたけど
自分の話をしてくれる先生はいなかった

先生は提案してくれた

「卒業式は出なくてもいいからホームルームだけ出ない？
あなたは東京に行ってしまうから他のみんなよりもみんなに会えなくなってしまいました
絶対に後悔するからみんなの顔だけ見とかない？」

凶星だった

僕はポロポロと泣き出した

中三がなんて情けない

学校に来ないでくれと言われたあの日から

心のどこかでショックを受けていたのかもしれない

先生の車に揺られながら

見納めになるであろう通学路を

頭に刷り込んできた

学校に着くと校長室に通された

僕が中学三年生になったときに校長が変わった

前の校長の方が好きだった

卒業証書を手荒にもらい教室へ行くと

先生が一人一人に言葉をかけていた

学校に行かなかったからか知らない顔がいくつもあった

何だかほかのクラスに来てしまったような感覚になる

一通りその儀式が終わった後

一人の男の子に色紙が渡された

僕も書いたやつだ

彼は県内なのだが地元を離れた高校にバスケで推薦が決まっていた

遠く離れる彼に色紙をプレゼントしようと

クラスのみんなで考えたサプライズだった

彼とは一つだけ思い出があった

実は彼はたばこを吸っていた

二人で学校の裏でたばこ吸っていた時
遠くから見つかってしまったことがある

彼は推薦が決まっていた

夜施設に電話があった

彼からだった

彼は泣きながら

自分は見張りをしていた事にしてくれないかと頼んできた

クラスで人気者の彼が

どんな思いで僕にお願いしてきたかと思うと僕まで泣きそうになった

本当にバスケが好きなんだなと思った

僕は二つ返事でわかったと言った

「俺の経歴にどんな傷が付こうがどうせ中卒だから」

そう言っていると彼は

ごめんと

泣きながらつぶやいた

それ以来、彼はたばこをやめた

色紙をもらった彼は僕をみつけると大きな体でハグをしてきた

やめろと言ったがやめなかった

彼よりも遠くに行く僕が

色紙をもらえなかったのにちゃっかりもらいやがって

少しでもやきもちを焼いたのは

ここだけの話だ

卒園する前夜

僕は施設を抜け出して
寺の息子の家にいた

特に思い出話をするわけでもなく
いつも通りに過ごした

じゃあなと見送ってくれた

いつもは寺の息子が寝たら帰るといふパターンなのだが
今夜は起きてくれていた
彼なりのやさしさだった

帰り道

朝方の、町が眠っている様な
この時間が好きだった

何度も通った海沿いの帰り道
日本海の荒々しい波がロマンチックさにかけるが
ここで育ったんだなあとかみしめていた

施設に戻り布団に体をすべりこませる
海風で冷えきった体が暖まってゆくこの瞬間が一番ほっとした
今日もバレずに帰ってこれたと

僕には珍しく朝食を食べた

今日僕が卒園するのは、施設の保母さん以外ほとんど知らない朝食を平らげ

小学生を見送った

施設に入って来た時の事を思い出していた

体よりも大きなランドセルを背負った弟の手を引いて登校した事

弟が母親を探しに行方不明になった事

施設の脱走計画を実行した事

嫌なことが多いはずだったのにいざ卒園を迎えるとそれなりにさびしかった

荷物はほとんどなかった

服もおさがりだし、ラジカセやマンガ本など僕の物という物がこんなに少なかったんだなと実感する

施設を出るとき

学校に行ってなかった弟が見送りに出てきてくれた

学校には見送ってから行くという理由で保母さんも許したらしい弟は中学一年になった

ぶっきらぼうにがんばってと言う彼を見て笑ってしまった

寝起きの悪さと照れ隠しに無愛想になるのは僕に似たらしい

おうと返事をし、車に滑り込んだ

振り返って寝起きの彼をもう一度見ると、力無く手をふっていた

この時、弟は僕の身長を超えていた

大きくなったなあ

兄ちゃんと頼りなく呼ぶ彼はもうどこにもいなかった

新幹線の止まらない駅に着くと

美恵子さんと担任の先生

後、美恵子さんと同じ位お世話になった保母さんがいた

前もって買っておいた切符をもらった

施設の指導員は往復切符

僕のは片道切符だった

ここで初めて実感が沸いた

僕は帰って来ないんだと

寂しさをなんとか食い縛り

ついぶつきらぼうになる

先生達は涙を隠すこと無く流していた

最後に1人ずつ写真を撮ろうとなったが

写真が苦手だった僕は嫌だと言ったが

恩返しのため

最終的には撮った

十五才が着なれないスーツを着て、無愛想にしている写真を

美恵子さんは今でも持っていて

会うたびにニヤニヤしながら見せてくる

びっくりしたのが履歴書の写真も持っているという事

本当の息子でもないのに

職場にいる数いる一人の子供なのに

本当にありがとう

電車で揺られながら

泣いているのを悟られたくなくて

寝たふりをした

施設にいる君へ

ここまで読んでくれてありがとう

僕の物語は三十分くらいで読み終えたんじゃないかな

でも君の物語はちがう

一日が永遠につづくようなほど長く、退屈だ

卒園を指折り数えてたらきりがない

苦しいよね

君の眠る前の暇つぶしになっていれば僕はうれしい

卒園したあとのイメージはできてるかい？

社会は施設や学校よりもずっと広い世界だ

君を「施設の子」ではなく

君自身としてみてる

君は自分で、君を決められる

何にでもなれるさ。宇宙飛行士にだって

少し

ほんの少しだけ先で待ってるね

大丈夫

君ならすぐ追いつくさ

人よりも早く、決断と覚悟をさせられてきた君ならきつと

また会えるのを楽しみにしてるね

あ、足音がきこえる

見回りがきたよ

目を閉じて

寝たふりをしなくちゃ

あとがき

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

この話は、実際にその時代に勤めていた保母さんに確認するとほとんどの方が知らなかったと言います。

そうです、僕らは

学校でも

施設でも

何事もなかったようなフリをして生きています。

信用して話したはずの保母さんにしゃべられてしまう。

こんなことは、日常茶飯事です。

保母さんは引継ぎなどで共有するという「業務」があるのでしかたないのですが

中にはいらぬ世話をやく保母さんもいらっしゃいます。

「話聞いたけど、気にすんな」なんて言ってきました。

バカなの！？（みんな！代わりに言ってやったぜ！）

それでも、僕らは毎日歯を食いしばって生きています。

一つだけお願いがあります。

もし、僕の施設が特定できても、誹謗中傷はやめてください。

現在、僕がいた施設は取り壊され

プライバシーが守られた

ユニット型児童養護施設になっています。

そこは、僕がいた施設ではありませんし

当時の保母さんも引退されています。

僕が育った施設は

もう、ないんですよ

どうか、誤解が生まれないことを祈っています。

児童養護施設に入っている子供たちは

令和二年四月（厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課）引用

24908人

「名も無き戦士」だった方たち

僕らに名前はない

LGBTQでもなく

発達障害でもない

五体満足だし

精神疾患もない

僕の場合はアダルトチルドレンでもなく

風邪もあまりひかない

でも僕を産んだ親はちょっと変わったた

育った場所には100人くらいの人が住んでいた

遊びに行くには許可が必要で

今日も僕らは必死に生きてる

悩みながらも、もがきながらも

特別な呼び名もなく

病気でもなく

誰からの支援もなく

ただその二本の足で立っている

親を恨んではない

なぜなら親であり続ける大変さを知っているから

特別な名前なんていらない

あえて言うならあの子の【父親】だと

胸を張って言おう

りゅうさん

「児童養護施設を経験した全ての人へ」

大人の都合によって、児童養護施設で生活せざるを得ない子どもは、今も、全国に約3万人います。その多くは親から虐待を受け、心に傷を負っています。そして、大人が背負うべき重たい責任を、幼い子どもが抱えて生きているのです。そういう現実がそこにはあります。著者は、中卒で就職し、長い時間を経て過去を開示しました。簡単なことではありません。社会に出て、苦い思いをし続け、多くのことに犠牲を払いながら、何とか地に足付けて一生懸命生きてきたはずです。自分のことで精一杯だったはずです。それでも誰かを勇気づけたという思いが、このようなアクションにつながったのだと思います。だから私は、同じ施設出身者として、彼を尊敬しています。

本書は、彼にとっての「アルバム」です。彼は、アルバムを開いて語ってくれたのです。

私たちは、つらく苦しい経験をし続けてきました。それが何度も夢に出てきて、そのたびに自身の運命を呪ったことでしょう。

それでも、見守ってくれている人、理解してくれる人は必ずいます。人数は少ないかもしれませんが、必ずいます。大人になって、児童養護施設出身だと他人に話すと、「苦労してきたんだね」「頑張ってきたんだね」と優しい言葉をかけてくれる人の方が多いのです。一般の方は、当事者が思っている以上に温かい目で見てくれます。

私たちは、自分の過去に負い目を感じることはないのです。だから、自分で自分を責めるのは止めましょう。社会を責めるのも止めましょう。

今、私たちの目の前に広がっている世界は、私たちが詳しくない「一般社会」です。そこに飛び込むと、同じ境遇でなくても理解してくれる人はたくさんいます。あなたを必要としてくれる人もたくさんいます。似ている境遇の人と出会って分かち合うこともできます。嫌なヤツもちょっといるけれど。

辛かった頃のアルバムはとりあえず閉じて、未来に向かって1歩、進んでみてください。未来には良いことも悪いこともあります。悩み、葛藤する日もあります。生きている意味が分からずに枕を濡らすこともあるかもしれません。

でもそれに、私たちの過去や家族は関係ありません。

今、私たちが“一生懸命生きている証”です。

いつか、みんなで「俺たち、頑張ったよなあ!」「私たち、偉いよねえ!」と笑いながら乾杯しましょう。その時に、お互いのアルバムを開いて、また盛り上がりましょう。

あなたが歩んだ未来の先で、
アルバムを抱えて、
待っています。

ヨ
ウ